

九十分ウォーキング

24期 徳田完二

だいぶ前からウォーキングをしている。特に運動好きでない私にはそれがほとんど唯一の運動と言っていい。私は歩数ではなく時間を計る主義で、ウォーキングは一日九十分が原則である。

なぜ九十分か？ それは中学時代の登校時間を基準にしているからである。私の中学校は自宅から山道を登り、峠を越えて下った先にあつて、片道徒歩で四十五分、距離にして三キロ半ほどのところにあつた。だから、九十分というのは中学までの往復時間に相当する。その時間が私の身体感覚にとって「ちょうどいい」感じがしたので、ウォーキングを始める時に原則九十分と決めたのである。

ちなみに、中学時代の通学路は車の通らない土の道で、時期によっては牛が放し飼いにされていた。当時、多くの農家は副収入を得るため、一、二頭の和牛を飼い、春から秋にかけて近くの山に放牧した。牛に勝手に草を食べさせるといのがその季節の飼育方法だったのである。放牧地は牧と呼ばれていた。それは松山や雑木林をいくつかに分けて、それぞれの区画を有刺鉄線で囲い、牛が行方不明にならないようにしてあつた。そして、ある程度草が減ると、次の牧に牛を移すのである。通学路周辺が牧になる時期には、道路脇で何頭もの牛が寝そべったりゆるゆると草を食んだりしていた。中学の三年間、わたしたちは晴れの日も雨の日も雪の日もそういう道を通つた。

現在ウォーキングで歩くのは主に自宅を起点とした住宅地である。その日の気分次第でコースを選ぶ。京都市の北西の角に住んでいるので、西陣と呼ばれる古い町並みを縫うように歩くこともあれば、金閣寺や龍安寺などの世界遺産を含む寺社仏閣の門前をハシゴすることもある。あるいは、北山杉が山の斜面に植えられた林間の道を往復する。ちなみに、この道はウォーキングやハイキングの愛好家がよく歩くところで、途中には知る人ぞ知る古刹があり、秋には見事な紅葉が目を楽しませてくれる。浄土宗の、名もないその寺は、観光客が来ないためいつもひっそりしているのがよい。その先へ行くと、令和元年七月に熊が目撃された旨を記した看板がある。だから、熊除けの鈴をつけてその道を歩く人をたまに見かける。私は熊に遭遇したことはないが、路上にいたウリ坊（イノシシの赤ちゃん）とバツタリ出くわしたことがある。向こうはわたしに気づくと、ひどく細長い脚をせわしなく動かしながら一目散に雑木林へ逃げ込んだ。母イノシシの姿が見えなかったのはさいわいだった。

私のウォーキングは歩き方にこだわらない流儀である。歩幅とか速度とか呼吸法とかには無頓着で、「その日の気分や体調にとって心地よいように歩くこと」を基本にしている。また、歩きながら特に考え事はしない。頭の中に浮かんでくることを浮かぶに任せている。たいていは他愛もないことで、わりあいよく浮かぶのは昔のことである。中学の通学時間を基

準に歩く時間を決めているせいか、中学時代のちょっとした記憶が浮かぶことが多いかもしれない。何かの曲が思い浮かぶこともある。たとえば、中学、高校時代から大学時代に聞いた懐メロである。

ものの本によれば、人類は狩猟採集時代、毎日数キロ程も度歩く生活をしており、からだの代謝機能はその運動量に見合っていたそうである。そして、現代人の代謝機能はそのころから全然進化していないため、せつせと歩かなければ太るのがあたりまえなのだという。ウォーキング中にそのことを思い出すと、歩く足にちょっと力が入る。

連載ミニエッセイ 6

源氏の末裔？

三十代の前半、広島に住んでいた。ある時、妻が近所の小さな本屋で『隠岐の伝説』という本を偶然見つけ、買ってきた。それは鳥取大学教授が書いた小さな本だった。隠岐に伝わるさまざまな話をコンパクトにまとめたもので、流人の話もいろいろ載っていた。その中に源義親のことが書かれているのを読んで驚いた。

源義親は清和源氏の系列に属し、頼朝や義経の曾祖父にあたる。任地の九州で悪行を働き、隠岐に流罪になったのだが、その後、隠岐を抜け出し、出雲で再び暴れたため討伐された。『平家物語』では「おごれる人も久しからず」の一例に挙げられている。が、驚いたのはそのことではない。その本に次のような記述があったのである。

義親が流されたのは西ノ島の宇賀というところだったのだが、「ここで一年余りを過ごす間、喜美(おき美)という土地の女性に男子一人を産ませ、後に単身出雲の国の雲津の浦に逃れた。宇賀には彼の子孫が繁栄し、比奈麻治比売神社の神主の祖にもなったが、源氏の紋所、笹竜胆(ささりんどう)を用いるこの地区の代宮屋(よこや)や徳田屋はその系統だという」

私が生まれたのは、同じ隠岐でも西ノ島ではなく中ノ島の御波(みなみ)という集落である。しかし、その集落には代宮屋と徳田屋が二つともあり、徳田屋(苗字は徳田)はわが家の本家筋にあたる。『隠岐の伝説』を読んだ直後の夏休み、隠岐へ帰った際に電話帳を調べたところ、隠岐には徳田姓が二軒しかなかった。つまり、私の生家と徳田屋である。

そこで考えたのは、代宮屋と徳田屋はもともと西ノ島の宇賀にいたが、どこかの時点で中ノ島の御波に移り住んだのではないかということだった。徳田屋はともかく、代宮屋(よこや)などという特殊な読み方の屋号を持つ家は、宇賀の代宮屋と何かつながりがあると思えたからである。しかし一方、わが家の家紋は笹竜胆ではなく、葵をあしらったもので、『隠岐の伝説』の記述とは合致しなかった(葵の葉を笹に置き換えれば、図案の基本構図として笹竜胆に似ていなくもないが)。

だから、源義親と私につながりがあるというのははなはだあやしいのだが、話の種としては面白いと思った。それで、酒の席で自己紹介をする時、「私はこう見えて、清和源氏の血を引いている可能性があるのです」とか「源義親という極悪人の子孫かも知れません」などと冗談を言ったりした。ある時、それを聞いた人が勘違いをして、「この人はお公家さんの流れを汲んでいると聞いています」と、何かの機会に私を紹介したことがある。が、それも酒の席でのことだったのであえて訂正はしなかった。

その後も家紋のことが気になり、本家徳田屋の家紋が笹竜胆なのかどうかを知りたいと思っていたのだが、昨年それを確かめる機会が得られた。

私の生まれた中ノ島（町名は海士町）の出身者で作る「近畿海士後鳥羽会」というふるさと会がある。昨年その集まりに初めて出席したところ、私より一つ年上で「ふたいとこ半」の関係になる徳田屋の人がいた。そこで、彼に源義親の話をした上で、徳田屋の家紋がどういう図案かを聞いてみた。彼はすぐにスマホを出し、家紋がいろいろ並んでいるページを出すと、「これです」と見せてくれた。それは、私の家のは少し違うものの葵をあしらった図案で、笹竜胆ではなかった。やはり私は源義親とは無関係なのだろう。とは言え、「清和源氏の流れを汲んでいる可能性」は酒席のネタとしては今後も使えるかもしれない。